

宮城 社会

〈語り始めた子ども〉「死無駄にしない」誓う

◎震災4年半（中）向き合う

宮城県石巻市大川地区出身の佐藤そのみさん（19）は東京の大学に通う。古里を舞台にした映画を撮ることを目指して今春、親元を離れた。

6月14日、東京都内であった復興支援コンサートに招かれた。1人で壇上に立ち、東日本大震災で児童と教職員計84人が犠牲になった母校、大川小にまつわる話をした。

「当時6年生の妹が学校で津波に巻き込まれ、犠牲となりました。これからの命を守っていくためにも校舎を残したい」

妹みずほさん＝当時（12）＝は通訳を志していた。妹のこと、母校の思い出。佐藤さんの話に約200人の聴衆からむせび泣きが漏れた。

〈公の場で発言〉

佐藤さんが震災と向き合えるようになるには、3年近い時間を要した。そのころ、校舎が壊されるかもしれないという話を耳にした。「校舎には卒業生や亡くなった子どもたちの夢が詰まっている。死を無駄にしてはいけない」。そう心に誓った。

卒業生の男女6人で昨年3月、「チーム大川」を結成、校舎を震災遺構として保存するため、公の場で発言してきた。

ことし3月、住民団体「大川地区復興協議会」の説明会。校舎の解体を求める大人の訴えを初めて直接聞いた。「つらくてたまらない。校舎をなくし、静かに手を合わせて子どもたちと語り合える場にしたい」

佐藤さんは胸が苦しくなった。「誰一人、間違ったことは言っていない」。長い時間をかけて話し合っていく必要のある難しい問題だ、と感じている。

〈「耳を傾けて」〉

チーム大川の一員で石巻市の高校1年只野哲也君は今年1日、16歳になった。

震災時は5年生。校庭にいて避難する途中、津波に襲われ、奇跡的に助かった。3年生の妹未捺さん＝当時（9）＝と母しろえさん＝同（41）＝、祖父弘さん＝同（67）＝を失った。

それでも「自分たちと同じ思いをする人を今後出してはいけない」と、見聞きした事実や教訓をありのままに語ってきた。

父英昭さん（44）は当初、九死に一生を得た息子をメディアに出していいのかわからなかった。ただ、一生懸命取材に応じる姿に「これでいいのではないか」と思った。被災当時を反すうし、次第に強くなっていることが実感できたからだ。

「大切な人を亡くした現実をつらく、逃げ切れるものではない。大事なものは現実と向き合い、喜怒哀楽を表現すること。話を聞いてほしい」という子どものサインに気付き、耳を傾けてほしい」

英昭さんの、大人たちへの呼び掛けだ。



コンサートで被災校舎の保存を訴える佐藤さん。スクリーンには、津波が到達した午後3時37分で針が止まった大川小の時計の映像が浮かんだ

拡大写真